

ふみこ句日記

2000/5/51

はじめに

昭和四十八年九月浅野房子さんと三朝温泉への車中、山下光子に出会ひ三朝の病院に療養中の大塚さんを見舞う旅だったが、話は吉川美佐姉のすすめにより京鹿子火曜教室に浅野さん 小田澄子さんが入会

九月初旬会に出席した様子だった。私も一か月おくれて 十月よりともかく出句した。

造る書くと言うことには全々自信のない出発だからあまり進んだ気持ちでは」ななかった。以来 もう止めるを繰り返した。美佐さんへの義理を続けていると言った。

そして十八年の年月が過ぎた。納得のいく自分の句句は殆んど無い。

個人で句集を作られた句友も何人があるが 火曜火鏡 合同句集の仲間入りが精一杯のこと、それ以上自分の句を活字にのこすことは考えてもいなかった。けれどここ数年前から句日記として 整理してみようと思い立った。下手、句になっていない句 それでよい。思うばかりでなかなかとりかかれないで 二、三年は過ぎた。

今回 玉造温泉 厚生年金会館 保養ホームに入所 山下さん 悦子さんと合流するまでの一週間 一人の機を得て漸く一頁をかき出し始める。振り返り見る十八年 記憶確かでないものもあるが思い出は楽しい；



第1章 野仏

吉祥会で大森先生 池永先生と一緒に当尾の石仏を巡りて

野仏の笑ひ在せり曼珠沙華

「草紅葉」兼題 幼き日の思い出

日を浴びてままごとの子や草紅葉

「顔見世」 去年は文友会で顔もせに。今年はただ思い出のみ

顔見世の名残を夢に見しも去年

お隣の浅野まゆみさんかわいい日本髪で

髪結ひて寝ず娘は待つ初詣

相川北通りの家根笹の中で狂い猫

猫の恋根笹の乱れ昨日今日

49	49	48	48	48
・	・	・	・	・
2	1	12	10	8
・	・	・		

上京の車中 浜松あたりで遠連山をみて

山の色幾重の果の雪解光

49
・
2
・

野仏の笑ひ在せり曼珠沙華

48
・
9
・
0

「水草生まふ」 兼題 日浅い私には大変むつかしい。ふと一善の車で探梅につれてもらった時
賀名生 だったかそして仁徳陵ところを走ったことを思い出す。

陵の薄陽の濠も水草生ふ

49
・
3
・
0

「春の雪」 兼題 直子さんの縁談がまた立ち消えた。

娘の縁談又もこわれぬ春の雪

49
・
3
・
0

一つの旅を終えるとまた次に心は走る。

花過ぎぬいづこともなき旅心

49
・
4
・
0

「桐の花」 兼題 小森田さんとあわくら荘に 帰りは姫路までバスにした。

山裾の雨に煙れる桐の花

49
・
5
・
0

「草の花」 兼題どこで得た句かはつきりしない。

野仏の顔かくすまで草の花

49
・
9
・
0

山下さん 小森田さん 青山さん 四人連れ 児玉東洋さんの車で佐多岬 桜島 霧島と廻っていただく。

別れて高千穂の国民宿舎に泊った夜 高千穂神社の夜神楽をみに行く。

夜神東の明りに映ゆる銀杏黄葉

49
・
11
・
0

「炬燵」兼題 一人暮らしの私の句だと浅野さんの御主人がはやす

置炬燵向ふ人なきあで蒲団

49
・
11
・
0

「年用意」 丹波から週二回野菜その他を積んで車が来る大塚「きく」の前でとまる。

大塚ののぶ子さんが電話で「丹波よ」と相川の店へしらせてくれる。

年用意丹波男の荷は売れ早き

49
・
12
・
0

小森田さんが名古屋から夕方までに相川へ着く筈になっているのに遅い

友待つに暮色刻々粉雪舞ふ

50
・
1
・
0

上京車窓より。

風ぬくき末黒野鳥群をなし

50
・
2
・
0

私は化粧水は使っていないが ふと出来た句

化粧水掌に冷えのなし春隣

50
・
3
・
0

「花曇」野崎詣りをしらの去年だったかと思う。

綿菓子も売れて野崎の花曇

花曇年甲斐もなき物忘れ

この様な軽やかな心に時もある

若やぎて夏来る歌口ずさむ

相川の家の軒に雀がいそかしげに出入りする

梅雨曇出入せはしき軒雀

相川の町の露地風景

花曇年甲斐もなき物忘れ

どこの寺院だったかなー

あらはなるちくり根洗ひ大夕立

「流れ星」この頃誰かが病氣をして心にかかっていた

看る夜の心もとなき星の飛ぶ

「空蟬」故かんげつ国分寺境内の礎石で遊んだ日をおもいだして

子等去りぬ礎石にならぶ蟬の殻

唐招提寺 観月の夜

大月夜唐招提寺の庭にイッ

「色鳥」山下さん青山さんと越前賤ヶ岳 長浜竹生島の旅

色鳥や朝の湖の小棧橋

「秋惜しむ」小森田さんと笑い乍らの出来たもの

秋惜しむほほ紅少こしさしてみむ

大塚さん「きく」の前に荷をおろす「丹波」のこと

新鮮と我から言ひて冬菜売

相川の座敷の庭に笹子の声がと井上さんからきく

独り居の朝茶の香り笹に来る

「大福茶」我が家は梅昆布茶が毎年のこと大福茶と思っている。

家長の座に心しまりて大福茶

「野焼き」あちこちに見る野火に次の命の芽生えを思った。

新らしき命を呼びて野火勢ふ

51
・
2
・
0

51
・
1
・
0

51
・
1
・
0

50
・
12
・
0

50
・
10
・
0

50
・
10
・
0

50
・
9
・
0

「春泥」 浄瑠璃寺への柊が浮かんできた。そして遠足の列が眼に入る。

春泥の径つき寺の小門あり

51 . 3 . 0

黄帽子水筒どの児の靴も春の泥

51 . 3 . 0

高山祭をめざして小森田さん 美佐さん 宮川ひでさんと下呂へ行く。折り悪し雨で宵の「曳別れ」はみることができなかったが車窓より禅昌寺の塔を眺めて

花の奥雨に煙れる塔のあり

51 . 4 . 0

小森田「さん 高田さんと妙高々原 穂高 と旅して 穂高の有明松尾寺にて、妙高々原にて

老鶯や御手の茶壺のかたむける

51 . 5 . 0

老鶯に唐松林行きにゆく

51 . 5 . 0

「落し文」 むつかしい兼題にふと昨年の賤ヶ岳を思い出して

湖見ゆる古戦場道落し文

51 . 7 . 0

亡妹貞子が死の近くなった頃梨をしきりにほしがった。梨の頃がくると思い出す。

病妹の欲りし日とあり梨供ふ

51 . 9 . 0

京都女専クラス会 九州志賀島 大宰府 柳川巡りにて

鐘楼に屋根草のびて露ふかし

51 . 10 . 17

四つ手網死魚の乾けり秋の声

51 . 10 . 17

「晩菊」相川の庭の菊 謡の小川先生のこと。

晩菊のうつろいはじむ白きより

晩菊やなほ美しくしき謡の師

耳の治療で大手町病院に通っていた頃

晩菊やなほ美しくしき謡の師

天満マーチャンダイズあたりにて

秋冷ゆる赤きストビラ散る舗道

相川の庭の垣をみて。

綿虫の籬越え来て雨を呼ぶ

西川さん 増田さん と淡路島健和荘泊り 灘水仙郷 若人も森など巡る。

帰途乗船場にて浅利貝を買う。

蛤の潮のしたたり出船待つ

東横線多摩川鉄橋通過

河原なる飛球の行方風光る

小田さんの案内で山下さんと三人で吉野山へ

52	52	51	51	51	51	51
・	・	・	・	・	・	・
3	3	11	11	11	11	11
・	・	・	・	・	・	・
0	0	0	0	0	0	0

吉野山春蘭の店は客呼ばず

相川の畑にて

花弁ゆれ奥より出でし虻の貌

相川の店二階の軒先に燕巣をつくる

燕の子黄ならびの嘴花のごと

あわくら荘に青山さん 西川さん 増田さん と。自然林のほうへ

木苺や山の佛の唇あせて

整くんが寝冷えしていた時

寝冷え子のうつろの瞳絵本散る

「蜜豆」ふとこんなこともあつたかな

蜜豆に唇さみし嘘を言ふ

一家の旅今津 海津大崎 竹生島 つづら荘泊り

八月も終わりに近い つづら荘の前の湖辺にて得た句

湖の色北より深み秋きざす

竹生島真向ふ宿の洗鯉

52
・ 4
・ 5

52
・ 4
・ 0

52
・ 5
・ 0

52
・ 6
・ 25

52
・ 7
・ 0

52
・ 7
・ 0

双
適入選
52
・ 8
・ 0

52
・ 8
・ 0

高野山登山ケールカーの窓より芒を眺めて

登るほど尾花は細し高野道

芒むらの眺めはあちこちに得られた。それに秋吉台の景を重ねて

行けど行けど穂芒波や夕茜

天高し隠岐の草原牛肥えて

霊場の鐘にも和さずけらつき

小田から頂戴した紫しきぶが大きくなって美しい実をたくさんに。

下枝より褪せて小庭の実むらさき

相川の家で
お謡の小川先生御母堂白寿祝い

庭雀床扨ひせしふとん干す

白寿祝ぐ願いをこめて羽根蒲団

相川の家元旦の水。若水を汲むにはあらねど。

若水や心新らたに栓開く

小田澄子さんの御親類
句友 藤田みや様の訃。

句友の訃夜を沈丁の香のせまり

52
.
9
.
0

52
.
9
.
0

52
.
9
.
0

$$\begin{array}{r} 52 \\ \cdot \\ 10 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{r} 52 \\ \cdot \\ 10 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{r} 52 \\ \cdot \\ 12 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{r} 52 \\ \cdot \\ 12 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

53
.
1
.
0

53
.
3
.
0

淡路島への船中よりの景を思い出して

春潮に群れ飛ぶかもめ水尾追ひて

大森先生御他界 城陽大森家を訪ねる
中を開かない門のうちには花ゆらす

門かたく喪の家ひそと花ゆすら

潮騒の丘の花冷学徒眠る

小森田 美佐さんと淡路島行く

城跡の古井戸涸れず苔の花

四国八十八ヶ所札どころ巡拝

桑の実に郷愁ありて札所径

相川蒔田家の告別式だったか

焼香待つ黒幕裾の蟻地獄

八十八ヶ所霊場巡り（文友会） 最終回さぬき路
杖は本当に持ち帰り

53
・
0
・
0

53
・
4
・
0

53
・
5
・
0

53
・
6
・
5

53
・
6
・
0

53
・
7
・
0

葉鶏頭一筋町の故郷晴れ
結願の杖納め得し鵙日和

相川風景　よく花屋さん狭い路にも立ち入る
花売の残す菊の香路地の朝

郷生の電話だったかなー

口ませし孫の電話や冬すみれ

クラス会佐渡

曼珠沙華島の陵人稀に

一善広島より出張大阪に来て泊る

出張のしげかれ疾かれ牡蠣土産
寄れば逃ぐ子に獅子舞の昂りて
寒餅を切る夜のまど？ 文とろり

旅立ちの鏡に向ふ夏帽子

久々の子に浴衣着せ今宵酌む

菜の花名を問ひ問はれ三輪の徑

元旦のお祝い

$$\begin{array}{cc} 53 & 53 \\ \cdot & \cdot \\ 10 & 10 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array}$$

53
.
12
.
0

$$\begin{array}{r} 53 \\ \cdot \\ 12 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

53
.
0
.
0

53
.
10
.
0

53
.
0
.
0

53
.
10
.
0

53
.
10
.
0

53
.
10
.
0

53
.
10
.
0

三代が屠蘇なみなみと三つの盃

54・1・1

年末相川の店より北通りの家へ帰宅の途中走り出た猫に足元狂い捻挫して佐古整形院で治療

冬崩や繻帯の足歩を試す

54・1・0

楽しんで相川の家えは沈丁花を挿し木いた。

すすく成長したかと思うと突然枯れもした。私はその香りがあまり好きでなかった、気になる匂ひだから何とか句材にした。

昂りぬ沈丁の雨音もなく

54・3・0

啓執や旅誘ひの友便り家族旅行 土柱 阿波池田

54・3・0

花の下城址碑ひそと休暇村

54・4・0

さぬき白鳥黒川温泉に糸島さん 増田さんの案内で

山の温泉は音なく春蚊早出でし

54・4・20

文友会西国三十三ヶ所巡拝 長谷寺にて

草餅に門前町の賑へる

54・6・0

高田さんに教えられ三年前栗を土に埋めた。何本か芽お出した中の一本がすすくすすくと伸びた。五十七年相川を去る時捨てていくのが惜しかった

実生栗初花咲けり吾も健

54・6・0

冷奴遠き旅より帰り酌む

小森田さんと上田城より別所温泉への旅

落ちるまま実梅の匂ひ城のみち

小森田さんと郡上八幡 井波を訪ねて

城の灯のうるみ郡上の踊更く

新秋や欄間彫る町木の香り

谷底は見えずバス行く山の霧

高原の駅コスモスの色極め

文友会 西国三十三番 巡礼

結願の梵鐘ひびく峯の秋

相川の家にて

太りゆく大根今日も抜き惜しみ

実むらさき実生をたのむ土かぶせ

青木の実名知らぬ鳥も枝くぐり

54・8・24大島醇子選

54・6・0

54・7・16

54・8・23

54・8・24

54・12・0

54・12・0

54・12・0

54・12・0

54・12・0

新年謡の会

心地よき帯のしまりや謡ひ初め

安藤さん青山さんと淡路島 健和荘で新年を過ごす 渡船のおり

新年の交す汽笛に群れ鳴

村上ぬいさんの急逝

通夜の冷え遺作のぼら絵明るきも

出棺す白梅こぼる砂踏みて

相川の家

雨戸くる朝なあさなを蒔育つ

菜園の菊菜色よし久の子に

浅野繁雄さんご他界 小森田さん入院

青葉して忌ごもる友と病める友

小豆島国民宿舎（池田）に集まりて

明易し潮騒近き島の宿

島の雷止みて翼船ましぐら

55
・
1
・
055
・
1
・
155
・
3
・
055
・
3
・
055
・
4
・
055
・
4
・
055
・
5
・
055
・
6
・
055
・
6
・
1

竹四郎病む

梅雨嵐し離れ病む子をただ祈る

海南林満喜子さん宅を訪ねて

見送られ見返る薄暮白あやめ

整の昼寝 私のひるね

健やかな孫の寢息やプール焼け

草引きて草の匂ひの手枕寝

あわくら温泉に幡井さんと行く店の決算をすませて

水引の紅ぬれづめに水車

みのり田の道登校のペダル踏む

温泉涼し重き一事を成しとげて

山下さんと退院した小森田さんを名古屋に訪ねて

退院の友いきいきと派手浴衣

大川一善 安子さんの車で信穂高 木曾濁河温泉

ダム澄める揺れ映りいる合歓の花

55	55	55	55	55	55	55	55
・	・	・	・	・	・	・	・
8	0	9	9	8	8	0	6
・	・	・	・	・	・	・	・
2	0	0	0	0	0	0	0

露天湯の一灯淡く月見草
 霊峰の碧に真向ひ秋ざくら

双適 55・0・3
 55・8・4

私の誕生祝として大台ヶ原へ一善安子さんがドライブしてくれた。紅葉が盛りの山々プロ野球日本シリーズ広島優勝のラヂをききつつ

先急ぎつつ仰ぎゆく峯紅葉

55・0・4

しみじみと語らな白菊活けて待つ

55・0・0

相川の住居

遠き旅はなやぎ帰り菊を焚く

55・0・0

枯菊を焚きつつしばし物思ひ

55・0・0

鉄橋を渡れば小駅片時雨

55・0・0

黄の翅の止り色増す実むらさき

55・0・0

天高し施肥よく効きし畑の色

55・0・0

七草粥

七草の数揃はねど畑の菜を

56・1・0

幡井さんと焼津 学保に庭からの一望焼津港
 一望に漁港おさめて梅の丘

56・1・30

浅野房子さんを訪ねて近くの温泉で一夜を

春炬燵尽きぬ話の果は伏し

56
・
0
・
0

春の冷え別れて一人立つ小駅

56
・
0
・
0

安子さんが井高野の手伝いを止めることについて一善の言い方処置に納得が出来ない筋の通らないことに妥協出来ない私の性

争ひてふと空しかり梅の闇

56
・
0
・
0

飯田知子短大入学祝い

合格の祝袋は字も太く

56
・
3
・
0

相川家

摘みし露独りの厨たのしかり

56
・
4
・
0

散る桜庭の胸像ただ黙し

56
・
4
・
0

武具飾る子は父となり遠くあり

56
・
4
・
0

真鍋先生の鮎のこと 市原さんのご主人の釣りのこと

解禁の夕べたまはる吉野鮎

56
・
5
・
0

釣りし鮎川に戻して春の風

上京車中

富士聳ゆ裾野の町の鯉のぼり

養老の滝へ

滝水をコップに汲みて喉しまる

相川地藏まつり

御詠歌の流れへいそぐ地藏盆

児玉正志さん急の来客

枝豆に酌みて不意なる遠き客

市原さんご夫妻の釣り

釣る夫の片辺に妻の秋日傘

高松高女のクラス会 萩 津和野

武家屋敷崩れ土塀に石蔭盛り

草子里時雨れる朝の大き虹

56
・
5
・
0

56
・
0
・
0

56
・
7
・
0

56
・
8
・
0

56
・
9
・
0

56
・
10
・
0

56
・
0
・
0

56
・
0
・
0

遂に一善があやまりに來た　貞子の五十年忌法要が近ずいて
 わだかまり解けて減りゆく盛みかん

相川の岩橋家近くの火事のあと

売地札草にかくれて秋暮るる

相川の家 私の誕生日

栗おこわ我が誕生は頃もよく

霜よけにレタス生々玉巻ける

供華の菊剪りためらひぬ眠り蝶

落葉炊く煙の中に思ふこと

新らしく菊きり供え旅に出る

鎌倉 お寺の名前を忘れたが

踏み惜しみつつ鎌倉の銀杏黄葉

師走の姿

ウインドに背まるく映る師走町

56
.
0
.
0

56
.
0
.
0

56
.
0
.
0

56
.
0
.
0

56
.
0
.
0

56
.
0
.
0

56
.
0
.
0

56
.
0
.
0

56
.
0
.
0

直紀 年末相川にきて手伝つてくれる

晦日そば孫の食べざま頼もしく

上京 成城の家

窓の梅ほころびゆくをみるしじま

散り梅のかかり濯ぎのもの乾く

八百様を訪ねて

春遠しこもれる叔母に京の菓子

海南の林さん受験（阪大）で泊まる

受験生泊めて祈りを同心に

相川の橋より

日脚伸ぶ中洲に群れる鳥の白

露の臺焼みその香の朝厨

仲塚の案内 垂水神社

散る花の流れゆくあり踏まるあり

郷生と小田原城

57
・
0
・
0

57 57
・ ・
0 0
・ ・
0 0

57
・
0
・
0

57
・
0
・
0

57 57
・ ・
0 0
・ ・
0 0

56
・
0
・
0

天主より振る手呼ぶ声花の中

57
・
0
・
0

相川の畑の垣越し中島さんのお嬢さん

葱坊主垣越しの子はよくしゃべる

57
・
0
・
0

耳遠く笑顔で応ふ木の芽雨

57
・
0
・
0

一善 安子さんと早発して青山高原にドライブそれは伊賀上野方面への再ドライブだったその数日前 室生寺に之も早朝出かけてた皆さんの写真を撮ったつもりが、カメラはフィルムが入っていなかった。 わざわざ伊賀上野 百合子宅まで訪れたのに 室生寺門前で草餅を買う 時間はまだまだ昼前 大野寺で昼弁当をいただき相談は急に伊賀上野へ

草餅にふと道変へて娘に急ぐ

57
・
0
・
0

小汐さん 増田さん 伊藤さん あわくら荘より鳥取砂丘 磨? 寺へ

直ぐ消ゆる足跡砂に五月旅

57
・
0
・
0

風光る砂丘を踏めば若返る

57
・
0
・
0

石段のあえぎに著我の花やさし

57
・
0
・
0

岐阜羽島へ行ったとき

単線の停車は長し青田風

57
・
0
・
0

思い出湖畔の旅

花栗の香に堂守の鍵開く
老鶯や堂守力こめて説く

北海道旅行

知床の大雪溪に昼の月
雪溪を映し知床五湖寂と
えぞかんぞう岬はるか
異国なる
昆布乾すさいはての島
明易し
獅子独活の花眼の限り・

成城の家 笹倉の庭に鷺草が

鷺草の鷺二羽となる娘に甘え

相川の最後の夏

魂迎ふ一人となりて古家守る

手ごなしで土をかぶせる秋の種
十指もて土をかぶせる秋の種
豪雷にいさかふ妹弟抱き合ふ
亡娘ノート紙魚しみ生きている悲しさよ

$$\begin{array}{cc} 57 & 57 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{ccccc} 57 & 57 & 57 & 57 & 57 \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{array}$$

57
.
0
.
0

57
.
0
.
0

57	57	57	57
.	.	.	.
9	8	8	8
.	.	.	.
0	0	0	0

秋立ちぬ東ねてさせり亡母の櫛
晚菊の咲くや明日より他人の庭
引き越しの荷隅にかばふ冬すみれ
秋そぞろ引越荷物嵩む部屋

水無瀬に移り来て

秋風も他人もやさし移り住み
見捨てかね新居に挿せり倒れ菊

幡井さんと山代温泉国家公務員保養所

寛ぎて見る山莊の紅葉濃し

水無瀬相川通勤
相川の駅のホーム

乗りおくれくやしき顔に冬の月

水無瀬の日々

寒椿にぶる起ち居のすべもなく

友呼ばむ一人に余る日向ぼこ

相川の庭

$$\begin{array}{cccc} 57 & 57 & 57 & 57 \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ 10 & 10 & 10 & 9 \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{cc} 57 & 57 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array}$$

57
.
0
.
0

57
.
0
.
0

$$\begin{array}{r} 57 \\ \cdot \\ 12 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{r} 57 \\ \cdot \\ 12 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

転宅の迫りし庭の実むらさき
移り住む名残の菊香衰えず

伊勢への旅の時を思い出して

玉砂利に歩の乱れなし神の留守

喜美子 聖子にはなさんと

大役の初旅富士が雲間より

日野百草園にて

梅日和白壁光る村一望

水無瀬

しつけとる春立つ朝の装ひに
水ぬるむ就職決り紅さす娘
桜餅娘の訪ひくれし小半日
目口なき紙の雛や掌になじむ

高田さん弔問

裏の家の雨に堪へ咲く八重桜

$$\begin{array}{cc} 57 & 57 \\ \cdot & \cdot \\ 10 & 10 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array}$$

57
.
0
.
0

58
.
0
.
0

58
.
0
.
0

$$\begin{array}{cccc} 58 & 58 & 58 & 58 \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 & 0 \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{array}$$

58
.
0
.
0

友の情雨に摘みきしわらび飯
忌に集るしのぶ日がなを花の雨

水無瀬楠公通の大楠像が学校庭に移し植え
楠公通の大楠学校庭に移し植え

除り去らる嘯り包む街の樹が
読むも憂し眺むも憂しや花の雨
集ればお国訛よよもぎ餅

秩父路 高松高女の皆さんと

秩父路につづく芽桑の夕映えて

一善と一言神社へ

万緑や一言神に願一つ

田植機の若者帽子に赤い花

文友会 東北の旅

桜桃たわわの国へ喜寿の旅

西川さん 水無瀬に迎えて

$$\begin{array}{cc} 58 & 58 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array}$$

58
.
0
.
0

$$\begin{array}{ccc} 58 & 58 & 58 \\ \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 \\ \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 \end{array}$$

58
.
0
.
0

58	58
.	.
0	0
.	.
0	0

58
.
0
.
0

杖たよる友出迎へに梅雨はげし

水無瀬

朝涼し咲きつぐ花を供華日記

引き越して来たる浜木綿咲き安堵

娘三人訪ひくれ風鈴よく鳴れり

一族の年長となり魂まつる

阪急32番街 皆美にて、竹四郎 喜美子と食事

動かぬ灯動く灯一望盆の果

洗ひ髪立つベランダの風は秋

蕎麦三日食べてさわやか信濃旅

色鳥や岳に真向ふ湖の宿

大きな鳥湖上を舞ひて夏去れり

庭紅葉もえて謡に力声

58
・
0
・
0

58
・
0
・
0

58
・
0
・
0

58
・
0
・
0

58
・
8
・
0

58
・
0
・
0

58
・
0
・
0

58
・
0
・
0

58
・
0
・
0

58
・
0
・
0

58
・
0
・
0

謡ひ果て山莊黄葉をのこし暮る

58
・
0
・
0

翅やすむ蝶もむらさき式部の実

58
・
0
・
0

独り居のよき日淋し日菊挿して

58
・
0
・
0

疎く住み安けき日々や杜鵑草

58
・
0
・
0

屑金魚育ち掬ひし児も少年

58
・
0
・
0

案内三日京の紅葉に酔ひ疲る

58
・
0
・
0

照紅葉京一望の峯の寺

58
・
0
・
0

山莊の集ひに菜飯冬ぬくし

58
・
0
・
0

冬入日竹叢透し莊なごむ

58
・
0
・
0

平成8年と9年の原本は見当たらない。

句は残っていたので

をみてください。

第2章 all

a

野仏の笑ひ在せり曼珠沙華	19730900	年用意丹波男の荷は売れ早き	19741200
日を浴びてままこの子や草紅葉	19731000	友待つに暮色刻々粉雪舞ふ	19750100
顔見世の名残を夢に見しも去年	19731200	風ぬくき末黒野鳥群をなし	19750200
髪結ひて寝ず娘は待つ初詣	19740100	化粧水掌に冷えのなし春隣	19750300
猫の恋根笹の乱れ昨日今日	19740200	綿菓子も売れて野崎の花曇	19750400
山の色幾重の果の雪解光	19740200	花曇年甲斐もなき物忘れ	19750400
陵の薄陽の濠も水草生ふ	19740300	若やぎて夏来る歌口ずさむ	19750500
娘の縁談又もこわれぬ春の雪	19740300	梅雨曇出入せはしき軒雀	19750600
花過ぎぬいづこともなき旅心	19740400	花葵露地の家々箱咲きに	19750600
山裾の雨に煙れる桐の花	19740500	あらはなるちくり根洗ひ大夕立	19750700
夜神東の明りに映ゆる銀杏黄葉	19741100	看る夜の心もとなき星の飛ぶ	19750826
野仏の顔かくすまで草の花	19740900	子等去りぬ礎石にならぶ蟬の殻	19750800
置炬燵向ふ人なきあで蒲団	19741100	大月夜唐招提寺の庭にゝつ	197508
		色鳥や朝の湖の小棧橋	19751000

秋惜しむほほ紅少こしさしてみむ	19751000	花卉ゆれ奥より出でし虹の貌	19770400
新鮮と我から言ひて冬菜売	19751200	燕の子黄ならびの嘴花のごと	19770500
独り居の朝茶の香り笹に来る	19760100	木苺や山の佛の唇あせて	19770625
家長の座に心しまりて大福茶	19760100	寝冷え子のうつろの瞳絵本散る	19770700
新らしき命を呼びて野火勢ふ	19760200	蜜豆に唇さみし嘘を言ふ	19770700
春泥の径つき寺の小門あり	19760300	湖の色北より深み秋きざす	19770800
黄帽子水筒どの児の靴も春の泥	19760300	竹生島真向ふ宿の洗鯉	19770800
花の奥雨に煙れる塔のあり	19760400	登るほど尾花は細し高野道	19770900
老鶯や御手の茶壺のかたむける	19760517	行けど行けど穂芒波や夕茜	19770900
老鶯に唐松林行きにゆく	19760516	天高し隠岐の草原牛肥えて	19770900
湖見ゆる古戦場道落し文	19760700	雪場の鐘にも和さずけらつつき	19771000
病妹の欲りし日とあり梨供ふ	19760900	下枝より褪せて小庭の実むらさき	19771000
鐘楼に屋根草のびて露ふかし	19761017	庭雀床払ひせしふとん干す	19771200
四つ手網死魚の乾けり秋の声	19761017	白寿祝ぐ願いをこめて羽根蒲団	19771200
晩菊のうつろいはじむ白きより	19761100	若水や心新らたに栓開く	19780100
晩菊やなほ美しくしき謡の師	19761100	句友の訃夜を沈丁の香のせまり	19780300
秋冷ゆる赤きストビラ散る舗道	19761100	春潮に群れ飛ぶかもめ水尾追ひて	19780300
綿虫の籬越え来て雨を呼ぶ	19761100	門かたく喪の家ひそと花ゆすら	19780400
蛤の潮のしたたり出船待つ	19770305	潮騒の丘の花冷学徒眠る	19780300
河原なる飛球の行方風光る	19770300	城跡の古井戸涸れず苔の花	19780605
吉野山春蘭の店は客呼ばず	19770405	桑の実に郷愁ありて札所径	19780600

焼香待つ黒幕裾の蟻地獄	19780700	落ちるまま実梅の匂ひ城のみち	19790716
葉鶏頭一筋町の故郷晴れ	19781000	城の灯のうるみ郡上の踊更く	19790823
結願の杖納め得し鴟日和	19781000	新秋や欄間彫る町木の香り	19790824
花売の残す菊の香路地の朝	19781200	谷底は見えずバス行く山の霧	19790824
口ませし孫の電話や冬すみれ	19781200	高原の駅コスモスの色極め	19790824
曼珠沙華島の陵人稀に	19780900	結願の梵鐘ひびく峯の秋	19791200
出張のしげかれ疾かれ牡蠣土産	19781000	太りゆく大根今日も抜き惜しみ	19791200
寄れば逃ぐ子に獅子舞の昂りて	19781000	実むらさき実生をたのむ土かぶせ	19791200
寒餅を切る夜のまど　とろり	19781000	青木の実名知らぬ鳥も枝くぐり	19791200
旅立ちの鏡に向ふ夏帽子	19781000	心地よき帯のしまりや謡ひ初め	19800100
久々の子に浴衣着せ今宵酌む	19781000	新年の交す汽笛に群れ鳴	19800101
草の花名を問ひ問はれ三輪の径	19781000	通夜の冷え遺作のばら絵明るきも	19800000
三代が屠蘇なみなみと三つの盃	19790100	出棺す白梅こぼる砂踏みて	19800000
冬蒨や繙帯の足歩を試す	19790100	雨戸くる朝なあさなを踏育つ	19800400
昂りぬ沈丁の雨音もなく	19790300	菜園の菊菜色よし久の子に	19800400
啓執や旅誘ひの友便り	19790300	青葉して忌ごもる友と病める友	19800500
花の下城址碑ひそと休暇村	19790420	明易し潮騒近き島の宿	19800531
山の温泉は音なく春蚊早出でし	19790420	島の雷止みて翼船ましぐら	19800601
草餅に門前町の賑へる	19790600	梅雨嵐し離れ病む子をただ祈る	19800600
実生栗初花咲けり吾も健	19790600	見送られ見返る薄暮白あやめ	19800600
冷奴遠き旅より帰り酌む	19790600	健やかな孫の寝息やプール焼け	19800800

草引きて草の匂ひの手枕寝	19800800	摘みし落独りの厨たのしかり	19810400
水引の紅ぬれづめに水車	19800900	散る桜庭の胸像ただ黙し	19810400
みのり田の道登校のベダル踏む	19800900	武具飾る子は父となり遠くあり	19810500
温泉涼し重き一事を成しとげて	19800900	解禁の夕べたまはる吉野鮎	19810500
退院の友いきいきと派手浴衣	19800717	釣りし鮎川に戻して春の風	19810400
ダム澄める揺れ映りいる合歡の花	19800802	富士聳ゆ裾野の町の鯉のぼり	19810500
露天湯の一灯淡く月見草	19800803	滝水をコップに汲みて喉しまる	19810700
霊峰の碧に真向ひ秋ざくら	19800804	御詠歌の流れへいそぐ地藏盆	19810800
先急ぎつつ仰ぎゆく峯紅葉	19801102	枝豆に酌みて不意なる遠き客	19810900
しみじみと語らな白菊活けて待つ	19801102	釣る夫の片辺に妻の秋日傘	19811000
遠き旅はなやぎ帰り菊を焚く	19801102	武家屋敷崩れ土堀に石露盛り	19811022
枯菊を焚きつつしばし物思ひ	19801102	草子里時雨れる朝の大き虹	19811024
鉄橋を渡れば小駅片時雨	19801200	わだかまり解けて減りゆく盛みかん	19811000
黄の翅の止り色増す実むらさき	19801100	噂消え火事場に茂る泡立草	19811100
天高し施肥よく効きし畑の色	19801100	売地札草にかくれて秋暮るる	19811100
七草の数揃はねど畑の菜を	19810100	栗おこわ我が誕生は頃もよく	19811100
一望に漁港おさめて梅の丘	19810130	霜よけにレタス生々玉巻ける	19811100
春炬燵尽きぬ話の果は伏し	19810300	供華の菊剪りためらひぬ眠り蝶	19811100
春の冷え別れて一人立つ小駅	19810399	落葉炊く煙の中に思ふこと	19811100
争ひてふと空しかり梅の闇	19810300	新らしく菊きり供え旅に出る	19811100
合格の祝袋は字も太く	19810300	踏み惜しみつつ鎌倉の銀杏黄葉	19811124

ウインドに背まるく映る師走町	19811200	えぞかんぞう岬はるか異国なる	19820629
晦日そば孫の食べさま頼もしく	19811200	昆布乾すさいはての島明易し	19820629
窓の梅ほころびゆくをみるしじま	19820200	獅子独活の花眼の限り能取岬	19820706
散り梅のかかり濯ぎのもの乾く	19820200	鷺草の鷺二羽となる娘に甘え	19820706
春遠しこもれる叔母に京の菓子	19820200	魂迎ふ一人となりて古家守る	19820800
受験生泊めて祈りを同心に	19820300	手ごなしで土をかぶせる秋の種	19820629
日脚伸ぶ中洲に群れる鳥の白	19820300	豪雷にいさかふ妹弟抱き合ふ	19820629
露の臺焼みその香の朝厨	19820300	亡娘ノート紙魚生きている悲しさよ	19820629
散る花の流れゆくあり踏まるあり	19820407	秋立ちぬ束ねてさせり亡母の櫛	19820629
天主より振る手呼ぶ声花の中	19820400	晩菊の咲くや明日より他人の庭	19821000
葱坊主垣越しの子はよくしゃべる	19820500	引き越しの荷隅にかばふ冬すみれ	19821000
耳遠く笑顔で応ふ木の芽雨	19820500	秋そゞろ引越荷物嵩む部屋	19821000
草餅にふと道変へて娘に急ぐ	19820500	秋風も他人もやさし移り住み	19821100
直ぐ消ゆる足跡砂に五月旅	19820511	見捨てかね新居に挿せり倒れ菊	19821100
風光る砂丘を踏めば若返る	19820511	寛ぎて見る山荘の紅葉濃し	19821100
石段のあえぎに著莪の花やさし	19820512	乗りおくれくやしき顔に冬の月	19821100
単線の停車は長し青田風	19820600	寒椿にぶる起ち居のすべもなく	19821200
花栗の香に堂守の鍵開く	19820700	友呼ばむ一人に余る日向ぼこ	19821200
老鷺や堂守力こめて説く	19820629	転宅の迫りし庭の実むらさき	19821000
知床の大雪溪に昼の月	19820629	移り住む名残の菊香衰えず	19821000
雪溪を映し知床五湖寂と	19820629	玉砂利に歩の乱れなし神の留守	19821000

大役の初旅富士が雲間より	19830103	一族の年長となり魂まつる	19830800
梅日和白壁光る村一望	19830200	動かぬ灯動く灯一望盆の果	19830800
しつけとる春立つ朝の装ひに	19830300	洗ひ髪立つペランダの風は秋	19830800
水ぬるむ就職決り紅さす娘	19830300	蕎麦三日食べてさわやか信濃旅	19830904
桜餅娘の訪ひくれし小半日	19830300	色鳥や岳に真向ふ湖の宿	19830900
目口なき紙の雛や掌になじむ	19830300	大き鳥湖上を舞ひて夏去れり	19830900
裏の家の雨に堪へ咲く八重桜	19830400	庭紅葉もえて謡に力声	19831100
友の情雨に摘みきしわらび飯	19830400	謡ひ果て山荘黄葉をのこし暮る	19831100
忌に集るしのぶ日がなを花の雨	19830400	翅やすむ蝶もむらさき式部の実	19831100
楠公通の大楠学校庭に移し植え	19830400	独り居のよき日淋し日菊挿して	19831100
除り去らる囀り包む街の樹が	19830400	疎く住み安けき日々や杜鵑草	19831100
読むも憂し眺むも憂しや花の雨	19830400	屑金魚育ち掬ひし児も少年	19831100
集ればお国訛よよもぎ餅	19830400	案内三日京の紅葉に酔ひ疲る	19831100
秩父路につづく芽桑の夕映えて	19830407	照紅葉京一望の峯の寺	19831100
万緑や一言神に願一つ	19830521	山荘の集ひに菜飯冬ぬくし	19831207
田植機の若者帽子に赤い花	19830521	冬入日竹叢透し荘なごむ	19831207
桜桃たわわの国へ喜寿の旅	19830611	一とせを会ひ得ぬ人の賀状増し	19840100
杖たよる友出迎へに梅雨はげし	19830700	しきたりをつづけて独り屠蘇機嫌	19840100
朝涼し咲きつぐ花を供華日記	19830700	トンネルを抜ける度雪深くなり	19840102
引き越して来たる浜木綿咲き安堵	19830700	ただいまと灯せば応ふ室の花	19840200
娘三人訪ひくれ風鈴よく鳴れり	19830700	ちゃん呼びで遠き日戻る木の葉髪	19840200

春寒やぱったり出会ひ出ぬ名前	19840200	思はざる遠富士すゝきの小窓より	19840900
争ひも夢よ首塚土筆の芽	19840300	朝風に彩をひろげてのうぜん花	19840700
老夫婦夜をばつぼつとひなあられ	19840303	風涼し天主の床の黒光り	19840700
雪解風由布岳さして大鴉	19840305	俳聖殿忍者屋敷も蟬しぐれ	19840900
土を割る花芽それぞれ色ありて	19840300	秋涼し絵とき説法に笑ひあり	19840917
によきによきと花芽ラッシュの庭の土	19840300	水軍の洞の跡や秋の潮	19840917
花苺児にしやがみ見す苺の粒	19840400	青い眼の手ぶりに見入る踊の輪	19840800
朝毎の独りに足りる庭苺	19840500	諷刺歌踊りの櫓は高調し	19840800
団地住みテレビの上の兜の威	19840500	送り火やもとの一人に戻る夜	19840800
ホース先そらせばそこも青蛙	19840700	帰省子の言葉大人ひふと淋し	19840800
花南天隣初嬰の襁褓干す	19840700	若者となるは別れか鳥雲に	19840800
待ちつつも一人を涼しと思ふ日も	19840800	夏霧の湧きて流れて山の湖	19840700
庭茂り払ふ枝にもある生命	19840800	山茶花の垣咲き始め謡声	19841100
孫の名をとりちがえ呼ぶ盆家族	19840800	冬の雲まこと知らせぬ人見舞ふ	19840000
夏萩に誰みくじ結ふ禁よそに	19840800	年忘れ流す憂さなきワインの香	19841200
忌ごもりの友訪ひて泪つ戻り梅雨	19840700	賀状書く亡母の字に似る母の年令	19841200
夏書終へ東塔西塔仰ぐ朝	19840600	寄せ鍋の沸々はずむ故郷ことば	19841200
空と無の多き夏書や朝鴉	19840600	するつと食ぶ熟柿に郷愁そぞろ湧く	19841200
りんどうや標高識のたつ小駅	19840900	吾が誕生秋刀魚で祝ひ心足る	19841100
高原列車おそしとゆれる花すすき	19840900	初富士や大東京の隅に住み	19850100
紫の小波たてり松虫草	19840900	林立の煙突富士に初煙	19850100

初仕事裾野の町の白煙	19850100	働けることの幸玉の汗	19850800
移し植え三年の梅に初つぼみ	19850200	言ふだけで気のすむ愚痴に団扇風	19850800
陽を集め日毎ふくらむ木瓜の花	19850200	階暑し団地こつこつセールスマン	19850900
蘭匂ふ独りの部屋に惜しき程	19850300	梅雨しめる記帳簿將軍旧居訪ひ	19850625
逆縁の香たく背なに春空し	19850200	苔の花將軍愛馬の小さき塚	19850625
春や憂し着かえし裾の静電気	19850400	將軍旧居もちの花	19850625
割れ込まれ句心とぎれぬ春炬燵	19850300	意を通し過ぎし淋しさ夏の蝶	19850625
初蕨（わらび）雨に持ちくれ留守の扉に	19850400	小駅の時計おそしと思ふ時雨来て	19851119
名にひかれ植え初花をひめ辛夷	19850400	名もゆかしこほろぎ橋の溪紅葉	19851120
天主より眺むる花の城下町	19850421	冬の雷一発のみや能登に泊つ	19851120
階高し一打の鐘に花の散る	19850421	冬ぬくし見舞ひし友にもてなされ	19851200
老鶯に耳あそばせて喜寿の足	19850509	謡声白山茶花の垣流れ	19851200
蝸牛わがもの顔に城跡の碑	19850509	小説の終りのごとく落葉散る	19851200
ぶちぶちと峠に摘めり夏わらび	19850618	愛語りし腰掛石や昼ちちろ	19850000
木苺の酔っぱ甘さや溪流に	19850617	曼茶羅に政子のむかし秋そぞろ	19850000
塗るかへて狭庭の客に青蛙	19850600	露けて墨のうすれしいわれ書	19850000
花ざくろ觸れて硬しや朱の色	19850600	輪飾りの小さきをかけ団地の扉	19860100
御名のごと清らに生きて蓮花	19850600	寒木瓜の紅を深めて雨上る	19860100
たまはりし紫式部さわ咲けど	19850800	盆梅や鉢の木謡ひたき夜なり	19860100
短夜や句机ならぶ夢の切れ	19850800	成人の日の背広着し子を見上ぐ	19860200
夜濯ぎて一日終りぬ恙なく	19850800	試験子の窓に憂きほど春深雪	19860300

弔ひて無口の帰り春吹雪	19860200	山男めきひげ面の帰省孫	19860800
ことなげに抜歯をされて春寒し	19860300	癒ゆること信じてきけり蟬の声	19860800
白梅や三百年を語る幹	19860300	癒ゆきざししかと涼しき今朝の風	19860900
ゆずり合ひつゝ空うばひ梅盛る	19860300	亡母の櫛ふとさしてみる盆支度	19860800
春時雨急げば合はす鍵の鈴	19860300	杖に頼る試歩の足もと萩こぼる	19860900
土を割る花芽それぞれ色ありて	19860300	寝団扇にうちわどころの故郷のこと	19860900
書き終えてほつと紅茶の浅き春	19860300	去ぬ燕便りとたよりすれちがひ	19860900
庭隅に鈴蘭匂ひ旅ごころ	19860400	鯛雲交しておかむ生き形見	19861000
屋根草もうすき緑に御寺春	19860400	風に雲に秋の深みを知る夕べ	19861000
枝うつるりすすき生き生きと新樹光	19860400	カタカナ語事典にいどむ老夜長	19861000
散るものは散らして扇塚の春	19860400	菊の香や来し方遠し五十年忌	19860900
明日に咲く牡丹見よと泊めくれし	19860500	雲を割り冬陽美し退職す	19861100
牡丹の今開かむと息づかひ	19860500	むなしさも煙としたり菊を焚く	19861100
身も心青く染まりぬ宮若葉	19860500	年用意心のこもる故郷の荷	19861200
山越ゆるあの辺野崎か花曇	19860400	満目の紅葉それぞれちがふ色	19861115
バスの窓遠見を塞ぐ栗の花	19860613	静かなりいで湯娘と在り去年今年	19870101
蛇の衣板一枚の城跡文	19860614	たまさかの晴着に帯と初芝居	19870100
アイスクリーム壳の熱弁落城譜	19860614	シテ謡ひ修めし安堵室の梅	19870100
鳶青し城見ゆ坂のオランダ塀	19860615	誰が為と笑はれもして初鏡	19870100
青葉冷え天主の跡の落城譜	19860615	梅白し陽ざしの居間の笑ひ声	19870200
踊太鼓すぐそこにきき足を病む	19860800	男子校女子校つづき芽ふく道	19870200

庭の陽を占めて寒木瓜紅の濃し	19870200	文学碑たてる峠に秋の富士	19870915
火廻要領祀符の墨字に春ぼこり	19870300	花すゝき駅近かそうで遠かりし	19870904
今日は憂し今日は美しくし木の芽雨	19870300	招くことコスモス揺るる無人駅	19870904
春愁を恥じて陶狸の腹を撫す	19870300	誰も来ずくつろぐ時の菊日和	19871100
名桜につきぬ名残の里を去る	19887049	老夜長旅に集めし箸袋	19871100
山裾の梨の花園に白昼夢	19870415	とっておきのワインもてなす良夜かな	19871000
花クローバ終の棲家の地鎮祭	19870500	南洲を語る白髪月の部屋	19871000
松の花傘寿を集ふ公の庭	19870513	紅葉濃し峠二つを越えし温泉	19871119
文学館出でてまぶしき若葉光	19870513	隣より争ひ声や秋の暮	19871100
目礼がことばよ通院路の茂り	19870600	石路さかり先は稲荷の鳥居径	19871100
青葉雨千人塚の匂ひ濃し	19870527	海知らぬ犬を毎朝冬の浜	19871200
土産店菖蒲と競ふ肥後名所	19870428	新らしき木の香の中に賀状書く	19871200
五月晴阿蘇の寝釈迦に帰途祈り	19870529	看とりつつ句帳かた辺に長き夜	19871000
夏草に五百羅漢のかくれんぼ	19870709	看とり女にある秋晴や特選句	19871000
夏草にあそびつ羅漢の泣き笑ひ	19870709	祭太鼓看とりの窓に遠くきく	19871000
自転車で五日の旅の戻り梅雨	19870700	安眠なき看とりの夜々に虫親し	19871000
初咲きの桔梗と供華に朝づとめ	19870800	愛語りし腰掛石や昼ちちろ	19871000
夜濯ぎの干場思はず下手な歌	19870800	露けしや墨のうすれしいわれ書	19871000
八階に住みて音なき遠花火	19870800	曼茶羅に政子の昔秋そぞろ	19871000
早発ちてさかさ富士みむ秋の湖	19870915	寒青空娘は頬染めて婚約を	19880100
霧晴れて小波が消すさかさ富士	19870915	梅二月婚約成りし娘のまぶし	19880200

婚近き娘と春いちご分ちあい	19880300	まぐなぎを払ひ百体地藏訪ふ	19880600
列車徐行深雪のここに友住ふ	19880200	探ねゆく流れ涼しき溪いで湯（太閤の湯）	19880700
たまわりし手造り味噌に露のとう	19880200	カンナ燃えひしめきあえる養鶏舎	19880700
枯芝にねてにらまるゝはらみ猫	19880200	雲走り峯にこま草這ひて咲く	19880700
春寒や三日もつづく探しもの	19880200	浜木綿にしばらくのこる夕茜	19880700
春灯失せものこゝに出て笑ふ	19880200	故里の植田にうつす己が影	19880800
椿落つ今日も名知らぬ鳥の来て	19880300	錦飾る故郷ならずも茄子の花	19880800
ゆかし名ばかり揃えて盆梅展	19880200	甚平着て今日も碁敵待つ	19880800
春潮に水尾ひく連絡船（ふね）のあと幾日	19880300	叔父跡地ひまわり咲かす家五軒	19880800
終航の間近かき名残瀬戸の春	19880300	朝顔や一家は北に赴任して	19880800
花菜漬土産に訪ひくれ京言葉	19880300	秋蝶が惜しむ別れの前よぎる	19880900
手染めとて淡き春着の京言葉	19880300	見送りの垣根アベリア咲きこぼる	19880900
花冷えて鬼女の棲みける巨き岩	19880423	滝二つ遠見の台に小手かざし	19880900
恐ろしき昔語りや花の里	19880423	穂すすきのみるみる刈られゆく売地	19880900
杉古りて黒塚ひそと花曇る	19880423	吾が暮し覗いて聞いて青芒	19880900
若やぎて傘寿の集ひ牡丹園	19880516	秋と思ふホームに目立つ黒い靴	19880900
声低く僧が餅売る牡丹寺	19880516	爽かや事終へて発つ旅の朝	19880900
手をとりにて笑む道祖神若葉光	19880516	大秋晴善光寺平一望に	19880900
花の雨眠る山湖を去りがたく	19880517	歌声をのせて寄せ来る芒波	19880900
老鶯や奥へとたずね政子墓所	19880601	コスモスのゆれる川沿ひ遊歩道	19880900
旧姓で呼びあふ莊の明易し鎌倉莊	19880601	母となる娘に寄す思ひ冬ぬくし	19881100

実南天紅し娘は母となる	1981100	天主閣仰ぐ茶店の藤こぼる	19890425
晚菊や終止符打たん独り住み	1981100	紫陽花の彩拵げゆく遊歩道	19890500
息子と同居決めむ独りの湯豆腐鍋	1981100	夏三つ葉雨の小やみに摘む留守居	19890600
トンネルを出て越前の雪景色	1981200	母も娘もショートカットにさくらんぼ	19890600
仏壇を買ひに越路へ雪清し	1981200	窓開き大向日葵に見つめらる	19890700
山ふところに香煙みちて初薬師	19890102	驕りても向日葵は好き美しくしき	19890700
初護摩の煙いただき肩かるし	19890102	留守居して一人に惜しき風涼し	19890700
紅梅のふふみしことも友へ書く	19890000	水撒きて陶狸うれしき顔となる	19890700
大茶盛廻す茶碗に和気あふれ	19890100	思ひきり水撒き散らす重きもの	19890700
寒木瓜の紅流れそう雨つづく	19890200	賞め言葉裏に返さず花クローバ	19890700
春寒し故なく心のとがる今日	19890200	水撒きて木々と話をする留守居	19890800
契約のとれてマフラー忘れ去ぬ	19890200	白粉花空家となりし垣に満つ	19890800
雪ごもり写経の日々と紙便り	19890200	病葉のこの量踏みて医に通ふ	19890800
春風や繰り上げ帰国のよき知らせ	19890200	鳶舞ふ高野の夏の深き空	19890700
引き越しの迫り咲きつぐ春の彩	19890300	野猿乗り夏の河原の若者等	19890700
転宅の別れの集ひ鱈すし	19890300	グラデオラス店の娘明るく迎へくれ	19890700
すましたる貴婦人めける柴木蓮	19890400	ボンボンダリヤ活けて村営コーヒ―館	19890700
昼顔や島にたづねる古き墓	19890430	漁火に想ひそれぞれ宿浴衣	19890800
夕明りのこる卯波や島に泊つ	19890430	盆列車着席までを送らるる	19890800
城下町一望にほふ栗の花	19890425	伝説の湖ははるかに芒原	19890900
お天主へ石垣高し松の花	19890425	湖も山もみるみる消えて霧の海	19890900

山の霧流れて速し湖生る	19890900	旅立ちを止めて眺むる強吹雪	19900100
のぼり来て賽の河原の細芒	19890900	おくれ咲く紅山茶花の雪化粧	19900100
旅に訪ふドラマ舞台の町も秋	19890900	潮の香をはこび来る風春近し	19900200
久の出会い杖目じると言ふも秋	19890900	水温みあひる天国てふ川辺	19900200
秋釣の成果に夕餉賑へり	19891000	指圧効きかろき足もと露のとう	19900200
秋雨のやまず留守居の夕仕度	19891000	桃ふふみ声出し笑ふと嬰便り	19900300
コスモスの身丈を埋めてはるか富士	19891000	初雛に招かれ曾孫しかと抱く	19900300
湧き水の秋澄む池に富士の影	19891000	亡母の忌や弟としのぶ春炬燵	19900300
天高し誕生釈迦の細き指	19891029	高々と辛夷咲きみつ城跡園	19900300
落葉かき風に根気の作務の僧	19891029	もてなさる小さき土鍋に土筆煮て	19900300
柿届く家なき故郷の友も老ひ	19891100	こんがりと焼味噌落のとうほのと	19900300
郷言葉の電話果なし老夜長	19891100	落摘みて老の自慢のちらしずし	19900400
命延ぶ泉いただき峯を越す	19891106	一心の白夕闇にほのと浮く	19900400
野仏の膝にさい銭紅葉散る	19891106	陶狸の背出で入る鳥の巣づくりか	19900400
冬瀟の音きゝ紀伊の朝茶粥	19891200	葉桜や友のギブスはまだ除れず	19900400
娘が立てし枕屏風に安眠して	19891200	露座観音見おろす里の柿若葉	19900500
晩菊に名残水やり旅に出る	19891200	柿若葉光る白壁つづく里	19900500
報恩講善女となりてしる粉賜ぶ	19891029	風薫る河童出そうな筑後川	19900500
花車たがへず来たり年用意	19891200	老鶯に迎えられけり峡の宿	19900500
心ゆくまで謡ひけり年忘れ	19891200	鱧一尾釣りと得意の帰宅ベル	19900600
娘の忌日となりて年経る小つもごり	19891200	釣りし鱧ほめて一箸つつ廻し	19900600

ご協力と酔い甘夏を嫁出し来	19900600	寄進瓦に筆持つひまも紅葉散る	19901119
紫陽花や登山電車は幾曲がり	19900600	庭小春鳩来て犬が少し吠え	19901200
お世辞とも思ひつつ買ふ夏帽子	19900700	晩菊や顔見ぬ電話言ひ過ぎし	19901200
夏帽子鏡の顔はややすまし	19900700	枯木してはるか富士見る道となる	19901200
のびて寝る猫のかたへに端居して	19900700	数の子の歯音うれしや八十路三つ	19910101
待つ荷物おそし木樺はしばみ初む	19900700	初詣極楽寺てふ名にひかれ	19910102
鎌倉の御寺涼やか友葬る	19900700	初旅や全き富士に真向へり	19910100
母として慕はれ甥とビールくむ	19900800	立春の陽に勇氣湧きトレーニング	19910200
風鈴や父母知らぬ甥よき父に	19900800	足鍛え眠り覚めたる山のぼる	19910200
五十年忌修すあの日も秋暑く	19900800	人波に流されてみる梅まつり	19910200
巨寺にみちのくらしき萩まつり	19900900	指呼の山みるみるかくす春吹雪	19910219
雨上がり紅たわゝなるりんご園	19900900	舞へ狂へいで湯ごもりの春吹雪	19910219
子に孫にりんご送りて津軽旅	19900900	ほの酔ひや孫つぎくれしお白酒	19910300
台風もよしといで湯にやり過ごし	19900900	ひなの前老も交りて撮る今宵	19910300
久に来し皇居のお濠曼珠沙華	19901000	梅林へ少しの坂も手を引かれ	19910310
コスモスの風に流せるほどの些事	19901000	白梅の古木に希ふ吾が余生	19910310
ただ声をききたく夜長の遠電話	19901000	湖見ゆる観音堂の大桜	19910400
バスを待つこわれベンチに秋の蝶	19901000	芽柳の日々に大ゆれ風青し	19910400
茫々の芒の中や美人塚	19901110	花散るや石州瓦の光る村	19910400
神在月とガイド熱あり出雲路よ	19901110	初蝶や癒えて佇つ庭彩ふえて	19910400
濃紅葉座禅堂の扉はかたく閉じ	19901119	初蝶やふつつり切れし思ひごと	19910400

新茶賜ぶ少年今は病院長	19910500	秋場所の終り落ちつき夕支度	19910900
芍薬や三度の転居共にして	19910500	ゆかしさに秋七草の寺巡り	19910900
染め止めて白髪軽し青葉風	19910600	尊氏も正成も美男菊衣	19911000
年令らしく白髪でおしゃれ夏帽子	19910600	天高し八十路二人が峯にイッ	19911000
釣り土産べらとはうれし瀬戸育ち	19910600	穂芒の波うねうねと芒山	19911000
早苗田の日毎濃くなる療の窓	19910600	秋茄子を嫁にすすめて共笑ひ	19911000
山の湖万緑の中遠くあり	19910600	神有りの出雲の湖はかもめ舞ふ	19911100
山間の夏霧深き駅に着く	19910700	穴道湖の大橋たもと柳散る	19911100
立葵彩を揃えて山の駅	19910700	穴道湖の秋の入口に出合ひけり	19911100
葉草湯の香りのこりて宿浴衣	19910700	名菓舗の近くに石焼芋の声	19911100
大寸の宿衣たぐりて岩魚膳	19910700	鳴き砂を踏めば聞えし秋の声	19911100
億の土地我がもの顔に青すすき	19910800	白髪を少しのぞかせ冬帽子	19911200
通院の道は川沿ひ月見草	19910800	もう一度鏡をのぞく冬帽子	19911200
時計おそし独り留守居の小粒ぶどう	19910800	久に会ふ少しおしゃれに冬帽子	19911200
秋暑しビルの掃除夫見上ぐ窓	19910800	諦めもした犬癒えて冬ぬくし	19911200
保養所のヴェランダ踊りの列を見る	19910800	独言ならずチロとの話始め	19911200
踊りうちわよべの土産と保養友	19910800	愛犬のチロも淑氣の尾をふれり	19920100
秋の湖哀話流して遊覧船	19910900	年の夜吾より古き茶棚拭く	19911200
温泉の町にお湯かけ地蔵秋うらら	19910900	立春大吉吾より古き茶棚拭く	19911200
敬老日ほの酔はされて若返る	19910900	名水へ凍ての溪路手をひかれ	19920103
誰が家ぞ芒刈られて地鎮祭	19910900	謡初帯山小さく装ふ同志	19920100

謡初足のねぢりを許し合ひ	19920100	いそいそと半袖えらび旅立てり	19920500
保養所で看る東京の雪ニユース	19920200	山迫る車窓次々藤の花	19920500
お返しを気にする老や冬いちご	19920200	若葉風亡妹の友とめぐり逢ひ	19920500
大山ははるか田に群る白鳥かな	19920200	短か夜や亡妹の友と泊つ出雲	19920500
旅帰り待ちくれ紅梅咲き満つる	19920200	ビール酌むかちんとグラス若やぎて	19920600
紅梅や吾が色にせむと言ひし亡友	19920200	ビール酌むドラマのように共鳴し	19920600
梅の闇逢ふ日約せし友逝きぬ	19920200	ビール乾し少し多弁に刻忘る	19920600
旅はずむ卒業進学祝ぎ二つ	19920300	向日葵が君臨空地の草いくさ	19920700
たまさかの母と息子の旅春の虹	19920300	木樺咲く一日の花の教えごと	19920700
春眠の十指ほぐしつ今日へ覚む	19920300	垣根ばら互の無事を老犬と	19920700
春セーター鏡に肩のうすきこと	19920300	夕仕度水の出細き大暑かな	19920700
美しく老いたきものよ柴木蓮	19920400	開け放つ窓に早起き木樺かな	19920700
シクラメン茶の間笑ひ溢れさす	19920400	酌みもして婿の気配り涼しき餉	19920700
ふる里はすみれたんぽ墓の径	19920400	倒産の去りゆく一家百日紅	19920800
桃の花さら前かけの辻地蔵	19920400	一言がちくりと秋の草に棘	19920800
お遍路の憩なる礎石大伽藍	19920400	遠富士の景ある売地草茂る	19920800
菜の花を手いっばい摘み日毎漬け	19920400	芝生踏む素足に伝ふ今朝の秋	19920800
日々摘めど菜の花畑の黄は濃ゆく	19920400	新涼や試歩の芝生に笑み交す	19920800
花杏真白従妹に甘え気味	19920400	高階に寝て眺め居り雲の峰	19920800
芍薬の蕾ふくらむ庭の日々	19920500	霧にまだ眠る町並試歩はげむ	19920900
発つ朝にうす紅ほのと花水木	19920500	夏霧の深し湯の町まだ覚めず	19920900

回廊に沿ふ白萩に清めらる	19920900	いさかひが笑ひに母と娘の冬至	19921200
水攻めの城跡や蓮の実の大粒	19920900	年用意母と娘の声いづれとも	19921200
苗木より三年無花果三つ熟れる	19920900	部屋に冷ゆ胸像の夫に独り言	19921200
長生きに想ひいろいろ敬老日	19920900	行く年へ刻む時計に息つめて	19921200
秋灯下親しきものは虫眼鏡	19921000	我が城と正月飾り四疊半	19930100
保養所の昼餉にぎやか大秋刀魚	19921000	繰るほどに夢ふくらみ来初暦	19930100
露芝生試歩の目標果し得て	19921000	二日早帰る子送る母の背	19930100
秋日和木椅子に一病話し合ふ	19921000	好物で老犬はげます寒の入	19930100
シャッターを頼む一会や寺紅葉	19921000	居候の老に朝毎寒玉子	19930100
庭園灯淡きに和せぬ木犀の香	19921000	老犬と共に留守居す梅日和	19930200
実梅の香まこと顔して嘘をきく	19920700	老犬の背に紅梅の一片が	19930200
夜の仏間大蜘蛛打ちて逃がしけり	19920700	一跳ねに広がる水輪水ぬるむ	19930200
耳遠く独りもよしと新茶汲む	19920700	春立ちぬ川面は白き雲浮かべ	19930200
魂迎ふやがては迎えらるる吾	19920700	白き雲浮かべ川面は春立ちぬ	19930200
帰省子に一夜越し方きかれけり	19920700	倅せは菌音にありし年の豆	19930200
山荘の富士見ゆ窓に姫りんご	19921100	今日よりはチロ居ぬ生活春寒し	19930330
夜霧匂ふ同郷なりし荘の主	19921100	姫こぶし一輪樹下にチロは死す	19930330
天高し無傷の紺を飛機が割る	19921100	春嵐おさまる朝にチロは死す	19930330
セーターの赤を鏡に問ふ八十路	19921100	春寒しピンクの布に巻く屍	19930330
声高や桜紅葉の女子校道	19921100	窓開けばおやつ待つチロ無き余寒	19930330
迎えられ娘の柚子風呂の香りかな	19921200	従姉妹どち幼な呼びして桃の郷	19930400

故里や摘みてたちまち木の芽和え	19930400	明易すや退院といふ別れかな	19930513
故里はお遍路の鈴あわあわと	19930400	濃紫陽花点滴の染みうすれゆく	19930513
朧夜や骨までしゃぶる瀬戸の味	19930400	錠剤をならべ数えて夕薄暑	19930700
短夜やはらから集ふ郷言葉	19930400	負け相撲少し頭痛の戻り梅雨	19930700
老鶯に迎え送られ札所寺	19930400	連れだちていそいそ母娘浴衣買ひ	19930700
仁王門くぐりて見上ぐ余花やさし	19930400	連れだちて母娘の購む派手浴衣	19930700
牡丹や余生つきこむ花づくり	19930400	浴衣茶会立居気になる娘を送る	19930700
新背広卒業の子を見上げけり	19930400	月下美人迎へ車で御対面	19930700
祝背広就職といふ巢立かな	19930400	月下美人息を弛めず咲き拵ぐ	19930700
就職は別れの一つ鳥雲に	19930400	手伝ひ娘不満あるげに水を打つ	19930700
散華とも霊園しとど花吹雪	19930400	咲きましたとて嫁が見す鶯草鉢	19930800
咲き競ひし源平桃も葉となりぬ	19930500	鶯草の飛びさる舞ひよう目離せず	19930800
藤娘出そう藤房ととのへり	19930500	水撒けば陶狸がうれし涙する	19930800
三代の旅信濃路を青葉風	19930500	これはまあ皿をはみ出る初秋刀魚	19930900
大手まり真白湯の香の中にゆれ	19930500	倉裡裏の鬼灯赤し妻若し	19930900
まじり気のなきみどり嶺よ露天風呂	19930500	猫難の子雀放つ秋彼岸	19930900
峯八分疲れは軽し藤の花	19930500	雀獲りしかり猫抱く秋彼岸	19930900
からみ合ひ花房乱る深山藤	19930500	映る影流るる音も水の秋	19931000
子に植えし桜桃熟るる少女有美	19930400	秋晴やいそいそ釣に碁敵と	19931000
遍路憩ふ礎石千年語りつく	19930400	秋晴や碁敵はまた釣がたき	19931000
点滴の紫班をさする梅雨の窓	19930605	釣りし沙魚はねる厨にはや碁音	19931000

雁渡る双手で握手する別れ	19931000	春寒やもう夢でしか逢へぬ人	19940109
口釜へ増ゆる孫との日向ぼこ	19931000	頑張れよ愛犬館も初日さす	19940100
柿送る案内電話の郷言葉	19931000	受験子に買ふ知恵袋文殊さま	19940116
柳散る入日に染まる湖のほとり	19931100	春寒し起ち居いちいち声あげて	19940200
五指ほぐすなだむ節おし今朝の秋	19931100	中古車群旗はたはたと春を呼ぶ	19940200
夜逃げとや閉させる窓に満月光	19931000	猫柳活ける娘もまたつやつやし	19940200
人恋ふかに垣越し延び来青き鳶	19931000	花葉挿しふと京の友思ひけり	19940200
猫舌は母似亡母恋ふ湯豆腐鍋	19931200	再会や土を割り出る花芽たち	19940300
物言はず一日留守居の師走呆け	19931200	分葱和へおふくろ味の老自慢	19940300
冬日向売れぬ空地は猫のもの	19931200	名もゆかし若草豆腐のうすみどり	19940300
カレンダーも庭も山茶花日々惜しむ	19931200	点心に一口ほどのたらの芽よ	19940300
柚子ほめてつい佇ち話いただけり	19931200	茄子胡瓜畑銀座と故里便り	19940600
留守居して米研ぐ窓に寒宵月	19931200	額の花一人で居たき時もあり	19940600
大晴れや蒲団干す家干せぬ家	19931200	夏帽子のぞく白髪も好しとして	19940600
爪切りて指美しや賀状書く	19931200	夏帽子年齢をきかれて逆に問ひ	19940600
吹き溜る枯葉の中の紅一葉	19931200	山梔子の真白につらき雨つづく	19940600
宵戎押さへ揉まれて娘はきげん	19940100	青葉風入れてもきれぬ愚痴話	19940600
ただいまの娘の声弾む宵戎	19940100	言ひたきをたたむくちなし真白なる	19940600
初釜へ晴着見送る母も美し	19940100	辻地蔵朝取りトマトにお眼細く	19940700
はよ来ませ郷言うれし初電話	19940100	暑に耐える白前掛の辻地蔵	19940700
寒玉子盛りあがる黄身老もまた	19940100	青田風通し一睡の浄土かな	19940700

喉走る名水冷えの心太	19940700	手折り来て芒挿しくれホーム友	19940900
空暗し呼べば遠退く夕立雲	19940700	敬老日過ぎて忘れを詫ぶ息子かな	19940900
今日も亦他所夕立とそれにけり	19940700	夕木槿一日思案し言ふまじと	19940900
花合歓や溪の音きく温泉の窓	19940700	傷つけしことに氣附かず青芒	19940900
含羞草いで湯泊りの老四人	19940700	押し分けも背伸びもなくて草の花	19940900
故里は金比羅歌舞伎花の山	19940400	侘びて住むごと庭隅の時鳥草	19941000
岐れ道ミモザ盛りの島巡り	19940400	住むは誰隣の芒刈られけり	19941000
一言の棘のいたみや夏薊	19940700	息子に目立ちきし白きもの柿をむく	19941000
一言の棘に猛暑の雲みあぐ	19940700	高階に泊つ霧ぬれの大夜景	19941000
風鈴や窓辺に母と娘の笑顔	19940700	秋灯に左傾ぎの寿百の字	19941000
昼寝覚めまだ侍り猫伸びきつて	19940700	ふる里や菜飯に小芋の煮ころがし	19941100
シルバーホーム笑ち会釈して廊涼し	19940800	大根抜く厨に待つはおろしがね	19941100
お元氣ねきれいに食べし夏料理	19940800	木あがりの茄子見落さず芥子漬	19941100
西瓜割漢につづく娘が果す	19940800	木あがりの茄子と思へぬ芥子漬	19941100
踊の輪みるみる三重に炭坑節	19940800	そつと出る夫追ふ妻や露の畑	19941100
高階に眼覺めてわつと雲の峰	19940800	医と寺の娘が幼な友木の葉髪	19941100
熱帯夜慣れて別れのなにとなう	19940800	秋風や札所の寺の大礎石	19941100
朝涼や肩まで掛けてふと淋し	19940800	木犀匂ふ金銀並びし故里の庭	19941100
雲の峰息子は太平洋の空ならん	19940800	着ぶくれて椅子のくぼみに孫自慢	19941200
満月や仰ぎし友はいま筑紫	19940900	ほほえみで答ふ遠耳冬すみれ	19941200
月白やせり上り待つ大舞台	19940900	言ふだけを言ふてコート忘れ物	19941200

爪切りて指美しく賀状書く	19941200	蹟きて土筆三本折りて詫ぶ	19950300
保養所の握手の別れ紅葉散る	19941200	雪柳白壁拒み闇寄せず	19950400
晩菊にそとさよならをしばし旅	19941200	白壁の汚れはじらふ雪柳	19950400
物忘れめつきり増えて年の暮	19941200	ワインの栓ぼんに拍手や夜はおぼろ	19950400
晩菊の一本供花とし剪りにけり	19941200	花は葉に母の素直は息子の憂ひ	19950400
補聴器を切りて一人の冬の夜	19941200	応えなく平寝落ちしよ花疲れ	19950400
ほんのりと米寿の頬に屠蘇の紅	19950100	落ち椿さつさと主掃きにけり	19950400
倅せは初夢もなき深眠り	19950100	兄弟が初鯉のぼり揚げにけり	19950500
住連飾りドアーにかけて十二階	19950100	母の日に娘二人の遠電話	19950500
開かんと冬薔薇秘めし力かな	19950100	母の日や六十年を母の道	19950500
梅一輪いちりん日々を留守居して	19950200	岐れ道えらべば險し果の余花	19950500
倅せや日々の留守居に梅一輪	19950200	試歩のぼす思ひたがわず藤の花	19950500
紅梅や白磁揃ひの朝餉の膳	19950200	絵タイルの道若やぎて地球の日	19950500
話す日々米寿祝の冬ばらに	19950200	高きほど大揺れてをり夾竹桃	19950600
毛糸解く編み直されぬ過去てふもの	19950200	雑草の茂りたくまし子もたくまし	19950600
春寒し幼なに戻るおないどし	19950200	草いくさ陣地広げし青芒	19950600
空地占め空の青吸ひ犬ふぐり	19950300	葉を研ぎて陣地広げむ青芒	19950600
枕に浮くさみどりを吸い春一番	19950300	職退くも余生と言へぬ梅青し	19950600
朝桜夢のあと追ふ思慕の人	19950300	娘名で忌の案内状梅雨じめり	19950600
聞くだけで事情を愚痴の春炬燵	19950300	海の風山の風入れ夏座敷	19950700
蹟きて掌をつくところ土筆んば	19950300	夕木槿汚れなき白閉じにけり	19950700

春秋を裾にひろげて讃岐富士	19950700	栗むくや消えぬ弟の国訛	19951100
はいはいと重ねてさびし含羞草	19950700	故郷もつ倅せしかと柿をむく	19951100
眠り草ねむらぬ葉あり反抗期	19950700	文化の日遠き明治の今日生れ	19951100
装ひし遠き日のあり薄衣	19950700	透きとおる秋や少年ハーモニカ吹く	19951100
咲き満つもなほあわあわと花みずき	19950700	鯛雲告げたき人は遠く住み	19951100
花水木乙女の恋の物語	19950700	いま倅障子をよぎる鳥の影	19951200
故郷発つ朝採りトマト重すぎて	19950700	山茶花や豆腐屋を待つ留守居役	19951200
傷つけしこと気付かずや青芒	19950800	冬桜口紅うすくひく米寿	19951200
やさしくも棘ある言葉夏薊	19950800	騙されてをれば事なし枯尾花	19951200
夏瘦せを知らずに生きて米寿かな	19950800	梅ヶ枝の終の一葉の散る別れ	19951200
掌中の珠とはこれよ白桃むく	19950800	いつまでも御元気でねてふ賀状の数	199601
無花果を鳥につつかれ犬叱る	19950800	退職と一筆添へし賀状かな	199601
新涼や又取り出して読む佳信	19950800	初入日三六六の一を呑み	199601
爽やかや返書のペンのよくすべり	19950800	ページくる吾が音寒し影寒し	199601
鳥わたる返書に三色ボールペン	19950800	小豆粥老ひてすこやか姉弟	199601
露けしや二人の友の新佛	19950800	春寒し言はでききをり二度話	199602
コスモスに手をふる急行待避駅	19951000	鳥は雲に二度行くスーパ―買いわすれ	199602
秋夕焼こつくりさんの道標	19951000	梅二月八十路わきまふ笑顔よき	199602
出ぬ電話そうか今宵は月の句座	19951000	娘等去にてかろき疲れに窓の梅	199602
家の味継ぎて伝えて祭ずし	19951000	よきことを知らす娘の声梅紅し	199602
貰ふなら遠慮はすまじ秋茄子	19951000	芽吹く庭健かと木々に呼びかけて	199603

鳥雲に謝しつつ辛き車椅子	199603	夕涼し肌になじみし藍の服	199607
鶯やに車椅子停めくれ息子よ	199603	暑からむ遅れて浴びる百視線	199607
とてせめて電話は春の声	199603	端居して出世無縁の長寿眉	199607
春彼岸弟訪ひくれ仏顔に	199603	暑に耐えし頬なでてみる今朝の風	199608
岬うらら成果一尾の小半日	199604	秋暑し訪問販売二度のブザー	199608
春の夕餉釣りし一尾を母の前	199604	夜々うれし子の友に賜ぶ古梅酒	199608
快気とはかくもうれしき春の朝	199604	花火見に橋へ子が押す車椅子	199608
春光やを拝み浴びをり癒え兆	199604	癒へてつくる迎え送りの盆団子	199608
怪端の小さき笑顔犬ふぐり	199604	白萩や見知らぬ同志笑みかわし	199609
鯉のぼりたゝかく揚げて待つ帰国	199605	寺育ち白曼珠沙華燃え知らず	199609
日本を知らぬ児を待つ武者飾り	199605	風やさしコスモスやさし車椅子	199609
薔薇咲かせ迎え明るき指圧院	199605	思はざる花つけにけり秋の草	199609
土産地路香りひろげて国言葉	199605	秋冷ゆる友の情の京しるこ	199609
木の芽雨偲び草とて届く茶器	199605	故里や出会ふたれかれ野菊晴	199610
片隅に生きる幸せ額の花	199606	栗むきつ老ひて姉弟郷言葉	199610
新茶くみほめ言葉待つ母の顔	199606	風のまま吾も白髪穂亡や	199610
草茂る逆らはぬこと牙につきて	199606	花は実の色増す石榴日々親し	199610
明易やドイツ転動ききしより	199606	急げともあわてゐるなども虫の鳴く	199610
泰山木朽ちてすがれる花かなし	199606	天高し卒寿見上ぐる明治晴	199611
朝涼やかからっぽ頭にからっ腹	199607	秋深き豆煮る母のひとり言	199611
いざ昼寝今日はいづこへ夢の旅	199607	冬に入る病上手に付き合わす	199611

いつまでも娘は子こたつの母苦言	199611	おばさんと呼びくれ三人桜餅	199703
よろこびにふとある怖き夕紅葉	199611	浮雲に名付けあそびや春の風	199704
熟柿つると食べばふるさと近く来る	199612	こちら向くラッパ水仙こんにちは	199704
枝桜紅葉に告ぐ別れ	199612	花衣車椅子にも湧くはずみ	199704
落葉掃きつい長くなる隣同志	199612	思い桜樹齡二百を恋う卒寿	199704
やがてこの娘が孫の嫁冬いちご	199612	花の雨ワインケーキの香に和む	199704
雲を割る冬日や老のねがふこと	199612	初咲きの大勺や句や婚の朝	199705
お元旦老母くり返すありがたや	199701	桜湯のぱーつとひらけり控室	199705
しわのなき黒豆に老母初お箸	199701	純白の花嫁孫となる五月	199705
初写真嫁孫の笑み三代	199701	柿若葉秘仏開扉めぐり会い	199705
愛犬と話す日日あり寒日和	199701	来し道の険しさ言はず余花仰ぐ	199705
翔ばたいて大きなおまへ初からず	199701	御幣上る薫風にのる上棟歌	199706
五十年忌白梅古りし月日かな	199702	目つむりて青汁ぐつとばら真紅	199706
孫嫁のもうすぐ二人梅紅し	199702	痛いとは生ける証しか梅雨の膝	199706
お化粧で他人顔なり春写真	199702	梅雨鏡拭けば亡母にとれほどに	199706
春障子四畳半の城明るし	199702	都忘れ咲かせ老いけり京遠く	199706
下萌に煎餅分ける愛犬に	199702	今年また梅酒たまわる命かな	199707
春耕をまぶしく見をりホーム窓	199703	子つばめの翔つを見送る車椅子	199707
啓室やシルバーホームの預け解け	199703	ナイターに興じる老母の片辺して	199707
春暁の正夢なれや初ひ孫	199703	白髪といていのちあるもの髪洗ふ	199707
向ひ合うパソコン句帖春炬燵	199703	ぎょうさんな娘の悲鳴蜘蛛の糸	199707

郷ばなしつきずやさしき団扇かぜ	199708	赤とんぼヘルパーと唄う車椅子	199709
夏服の派手を鏡に息子の土産	199708	星月夜シルバーホーム消灯はやき	199709
きれし夢惜しや貴船のはも料理	199708	誰似かと爽やかろんぎ初曾孫	199709
迎はるる仏とならで魂迎ふ	199708	白桔梗時には欲しい母小言	19970900
仏めく盆僧の額黒光り	199708	おきし手を又も引きよす枝豆を	19970900

第3章 母お気に入り句

端居して出世無縁の長寿眉

199607

この句は四国の故郷で読む故郷は香川県高松市国分 で、従弟の村上勝美宅を宿としていた。そこで村上勝美氏の眉を読んだ句。京鹿子の特選賞となり、数ページの誉め言葉があった。端居の季語は夏である。

初入日三六六の一を呑み 199601

三六六は閏年からくる。1996年は閏年だった。ひねった句。

臘夜や骨までしゃぶる瀬戸の味 19930400

四国高松で従弟の村上久夫さんに 鯛の兜煮 をご馳走になった。骨までしゃぶる は京鹿子の海道主宰から手紙で「骨までしゃぶる 全く感心いたしました 故郷はよいもの 良」と。故郷のあるものは倅ですね と

啓室やシルバーホームの預け解け 1997/03

1997年2月に。私と喜美子と清子さんの3人で ドイツ デュッセルドルフの郷生のマンションに10日間泊った。その間 母を湘南台の老人ホームに預けた。その帰国が丁度〰月上旬だったので。

春暁の正夢なれや初ひ孫 1997/03

清子さんが千里を懷妊したとの知らせをめでて。

第4章 年表

ふみ子略歴

明治四十三年 名古屋で大川清長女として誕生

大正九年 高松女学校入学

大正十四年 京都女子専門学校入学

卒業後一時故郷で先生をしていたが

ほとんど京都で下宿生活

昭和九年 太三郎と結婚

昭和十一年一月 大阪長柄にて竹四郎出産

昭和十一年九月 太三郎死去

昭和十九年 強制疎開で相川に越す

昭和二十年 終戦

昭和二十五年 相川文具店開店

昭和四十八年 俳句始める

昭和五十七年 水無瀬マンションに越す

昭和六十三年 鵜沼に越す
平成九年九月他界

年表

年号	西暦	句数	すまゐ
昭和四十八	1973	3	相川店
昭和四十九	1974	11	相貝店
昭和五十	1975	15	相川店
昭和五十一	1976	16	相貝店
昭和五十二	1977	17	相貝店
昭和五十三	1978	17	相貝店
昭和五十四	1979	26	相貝店
昭和五十五	1980	29	相貝店
昭和五十六	1981	78	相貝店
昭和五十七	1982	40	水無瀬
昭和五十八	1983	37	水無瀬
昭和五十九	1984	45	水無瀬
昭和六十	1985	39	水無瀬
昭和六十一	1986	41	水無瀬
昭和六十二	1987	45	水無瀬
昭和六十三	1988	49	鵜沼

平成元年 1989.58 鵜沼
 平成二年 1990.57 鵜沼
 平成三年 1991.57 鵜沼
 平成四年 1992.69 鵜沼
 平成五年 1993.75 鵜沼
 平成六年 1994.74 鵜沼
 平成七年 1995.67 鵜沼
 平成八年 1996.38 鵜沼
 平成九年 1997.45 鵜沼 十月歿す

句日記に登場する人々の紹介（敬称略）

・女学校のクラスメート

増田君子、小木原清子、生島孝子、小汐逸子、伊藤カネ、豊辺幸子、請川カツ

・女専のクラスメート

前田のぶこ、浅野房子、磯川きよこ 高田ヨシ子、高橋法子、藤本悦子、池内よしえ、吉川美佐、塩見よしこ、山下光子、佐久間静子、小林ふじ

・相川文具店の関係者

細井輝雄 細井恵美子 細井整 青山さん

・家族

福井百合子（長女）、笹倉聖子（次女）、飯田不二子（三女）、吉川竹四郎（私）、喜美子（竹四郎の妻）、直紀（孫竹四郎の長男） 郷生（クニオ 孫 竹四郎の次男）

・親類

大川一善(弟) 大川安子(妻) 千田和彦(甥) 千田多香子 千田香代子 千田敏夫(甥)
(従弟) 大川一幸(従弟) 笹倉温子(聖子の娘) 福井陽子(百合子の娘) 村上久夫(従弟) 村上勝美

あとがき

母は句集の出版を望んでいなかったのですが、横山実習室に放置したままだったが、

<http://www.geocities.jp/takefumi1604/index.html>

横山実習室へはいまでも「横山実習室 検索」で入れるがヒットしたのには私の身辺整理に一環として このノート
の添え書き部分も 「EXファイル」にしてみた。 鶴沼 句日記執筆がヒットしたのには驚いた。 かつては「イッ」で
検索すると「大月夜唐招提寺の庭にイッ」 平成三十年四月から始めて 3ヶ月 かかった
この本を印刷するつもりはないが、pdf で配布できるようにしたのが私の役目だった
1000句のなかで 母おきにいりの句を 第3章にまとめてみた。 そのなかで

端居して出世無縁の長寿眉

を代表作としたい。

平成三十年七月

吉川竹四郎

あとがき2

母 吉川ふみ子のメモランダム

ついにくるべき日がきました。年に不満はないというかもしれませんが、昨日の別れは残念でした。享年90才でした。リウマチで手足の痛さに苦しんでいた2年でしたが、10月6日クモ膜下出血で一瞬にして昏睡状態に陥り死の苦しみは望みどおりになりました。

私と母とのつきあいは61年で、私の知らない母の前半生を私に話してくれるかともわずかになりました。

母は大川清 きくえの長女として、名古屋で生まれました。清が医学生で、名古屋で住んでいたのです。しかし香川県綾歌郡端岡村国分で医者 of 長女として育ち、延子、貞子、清一、一善と続きます。一善叔父とは19も離れているから親のような姉でしょう。高松の県女から京都女専に進みます。清は医者 of 養子を母に期待したのと、縁遠うかったのとで、27までハイカラ生活をしていました。わたしに麻雀や花札を教えたのもそのころの生活のせいでしょう。

父吉川太三郎との結婚は昭和9年、私の誕生は昭和11年1月、太三郎没が11年9月8日ですから、2年間の結婚生活でした。淀の水女学校と此花商業の私学を経営する父との結婚は1回の見合いで決めたやけくそ気分だったようです。太三郎の父竹三郎、妻いと、百合子（14才）、聖子、不二子、正三、武雄、千代造、綾子、の在所帯のきりもりが始まるのはあの性格のせいでしょう。この舞台が大阪の長柄です。戦争中の昭和19年に強制疎開で、

相川に移ります。その頃第一善、従兄弟の一幸さんが下宿していました。

売り喰い生活も底をつき昭和25年、相川文具点を始めます。最初はお茶と文具でした。文具には丸亀の田岡屋が参考になった。その前に終戦で戦地から帰ってきた叔父たちと吉川製釘所をいまの新大阪駅の真下で始めますが、失敗します。

正三、武雄、千代造、綾子、百合子、聖子、不二子の内武雄は恋愛でしたが他はすべて見合いでその取り仕切りはプロ級です。

私竹四郎の扱いは特別でした。四国からの女中さんを付けたり、甲南中学へ通わせ、大学時の京都に下宿させるなどなど。私への期待が大きかったのは、私にとってはプレッシャでしたが、高校2年の時に発病した肺結核の病弱であきらめもあったようです。卒業後は大学の先生にも考えましたが、薬の進歩で元気になり就職することになり、日本初のコンピュータ（東京の三菱原子力）に決まり、昭和37年に上京する時は時自分の行動範囲が増えると言って反対しませんでした。細井さん、青山さん、和彦さんらの店の人たちとの生活は34年頃から始まります。

相川の家処分、水無瀬のマンションの売買、土地の切り売り等の不動産の売買時の慎重な判断はまわりから親分扱いされたようです。

ここ藤沢に私達が移ったのは昭和62年秋、母は水無瀬をたんで63年に、この部屋で暮らします。友達がおおく、女学校のクラスメート、女専のクラスメート、成蹊短大の生徒さん、店の文具関係、僕の友達（私とは音信不通）、親類付き合いなど年賀状、冠婚葬祭の贈答の律儀さは明治女です。最後に浄土真宗の信心は俳句と並んで特筆に値します。この母が極楽にいつていないはずは有りません。希望どうりに長柄のお墓に60年遅れで太三郎の横に寝かしてあげます。

合掌